

可視化できない歯痛

Invisible Dental Pain



飯田 崇

Takashi Iida

日本大学松戸歯学部 顎口腔機能補綴学講座 准教授

歯科臨床の現場では、使用器材や診断技術の発展により、医療技術の向上が日々進んでいる。特に画像検査の進歩やマイクロスコープの歯科領域への導入は、診断精度および治療精度の向上に大きく寄与してきた。これらの技術革新により、従来は可視化が困難であった所見が可視化できることが、その一因であると考えられる。

日常歯科臨床においては、検査、診断、治療の順に診療が進められ、診断は口腔内検査や画像検査といった視覚的情報を基に、歯科医師のこれまでの臨床経験を加味して行われている。この診断過程は有用である一方、既存の疾患イメージや症状パターンと一致しない症例においては対応に苦慮する場合がある。

歯の痛みを主訴として来院する症例の多くは器質性疾患であり、適切な診断と治療により症状の改善が得られる。しかしながら、同様の診断過程を経て治療を行っても疼痛が改善しない症例も存在する。その代表例が、歯に原因がないにもかかわらず歯痛を呈する異所性疼痛、神経障害性疼痛、痛覚変調性疼痛である。これらの疼痛は歯髄炎や歯周炎と類似した臨床症状を呈することがあるが、抜髄や抜歯といった不可逆的処置によって疼痛が改善することはない。また、器質性疾患が併存し、複合的に疼痛を引き起こしている可能性も考慮する必要がある。

本講演では、複数の症例を提示しながら、検査、診断および治療について解説し、皆様の臨床にフィードバックできたら幸いである。

【略歴】

2003年 日本大学松戸歯学部卒業

2007年 日本大学大学院松戸歯学研究科修了

2007年 日本大学松戸歯学部 助教

2010年~2012年 デンマーク王国オーフス大学歯学部 ポストドクトラルフェロー

2016年 日本大学松戸歯学部 専任講師

2021年~ 日本大学松戸歯学部 准教授

【資格】

公益社団法人 日本補綴歯科学会 専門医、指導医

一般社団法人 日本口腔顔面痛学会 専門医、指導医